発心往生論

穢土の夕映え

馬場あき子

馬場あき子（ばばあきこ）
1928年　東京に生まれる
　　昭和女子大卒業
現　在　現代歌人協会員
　　歌誌「まひる野」同人
著　書　歌集「早笛」「地下にともる灯」
　　「無限花序」「飛花抄」（新星書房）
　　「式子内親王」（紀伊國屋新書）
　　「鬼の研究」（三一書房）
　　「大姫考」「遊狂の花」（大和書房）

発心往生論　穢土の夕映え

昭和四十九年七月十日　初刷発行

著　者　馬場あき子
発行者　沢藤盛祐
発行所　芸術生活社
東京都台東区台東四―二九―一二
〒一一〇　電話東京（〇三）八三三
―一六六一　振替東京三〇六七〇
印刷所　幸進社

検印廃止
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

© Akiko Baba 1974　Printed in Japan
1095-1192-1892

もくじ

序章　よみがえる地獄　命終の火焔車　7
第Ⅰ章　見者の虹　寂昭法師〈石橋〉を渡らず　25
第Ⅱ章　襤褸の聖者　野たれ死にの思想　41
第Ⅲ章　奇行上人(一)　増賀上人の華麗な挑発　59
第Ⅳ章　奇行上人(二)　内記上人の諷刺と涙　75
第Ⅴ章　悪人往生　武者の発心　85
第Ⅵ章　天狗幻術　魔往生の犠牲者　101
第Ⅶ章　遊女成仏　汚穢の菩薩　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第Ⅷ章　賤の超克　餌取法師の彼岸　137
第Ⅸ章　入水の思想　即身成仏の苦しみ　153
第Ⅹ章　女人落飾　黒髪のかなしみ　171
第Ⅺ章　罪と罰の円環　三人法師物語　187
第Ⅻ章　無常の虎　白骨を抱く女　205
終　章　高貴なる愚鈍　生きながらの死　221
あとがき　235

装幀　井上洋介

発心往生論

穢土の夕映え

序章　よみがえる地獄

――命終の火焔車――

今日、地獄を信ずる人はないとしても、〈地獄〉が現代の思想として、喩として、最も身近なテーマであることだけはたしかである。そういう意味では、いちはやく滅亡してしまった〈極楽〉なるものに対して、〈地獄〉は現代の思想としてむしろ甦ってきているといえるだろう。私はいま『地獄草紙』の荒唐無稽な構図と形象を目前にひろげながら、当然のこととして、そこに現実のパロディを見、この〈地獄〉という加虐と被虐との両様に実感をそそる世界から発想されてはじめて〈彼岸〉という超越の思想は生まれたのであろうと肯定する。地獄・極楽という相対的な均衡の中にあった思想の一方がほろび、一方だけがいきいきと甦りつつあるということは、時代そのもののいびつさにもよるだろう。いいかえれば、〈地獄〉が鼓吹され、より苛酷に形象化された時代と、感覚的にも実感的にも近似のものがあるというのが現代であろうか。

『往生要集』は末法思想の深刻化する中で編まれた専修念仏の書であるが、それは同時にバラエティーに富んだ八大地獄の詳細を伝えたことによって特色的である。八大地獄は、地下数千マイルかにある閻魔王国の、そのまた地下数千マイルに当って最初の等活地獄があるとされる暗黒世界である。以下、さらに下へ下へと地獄は層をなしており、黒繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・無間地獄、という重層構造で、それぞれ生前の悪業に照合して送りこまれるのである。

しかもその一つ一つの地獄が単純ではなく、もっとも地上に近い等活地獄を例にしても、四つの門によって厳重に守られ、その外にはさらに十六箇所の付属の地獄がある。その上、地獄卒の鬼によって、鉄杖で打ち砕かれたり、料理でもされるように刀で切りこまざかれたり、あるいは極熱の屎どぶに放りこまれてピラニヤのような口をもった虫に食われたり、熔鉄の雨に打たれ、あるいは鉄の釜で炒り焼かれ、または火焔をはく鳥獣や、刀剣のような嘴や爪をもった鳥獣に食い裂かれる、という、かぎりない責め苦を受ける時間が、また気が遠くなるほど時間の観念を超えたものなのだ。しかもそれは、何度でも生きかえらせられ、責苦は永遠性につづき、死ぬことは許されない世界なのである。

一度送りこまれたら永遠に浮かび上がれそうもないこれら地獄の住人の罪状がまた、魚鳥獣などを殺した殺生罪であったり、邪淫妄語罪であったり、飲酒、偸盗、仏法誹謗、そして殺人、中で最も重罪は尊属殺しであるが、殺人はともかく、その他の罪状なら現世のしくみそのものが人にそれを強要しているようなもので、世の生活者たるもの、その罪状の一つにも当らないと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

いうものはありえないといえる。その厖大なエネルギーの消費にめまいを覚えるほどに、幾階層にも区切られた八大地獄の阿鼻叫喚はまさに酸鼻というほかないが、それに比べると、極楽のイメージは単一すぎてむしろ寂しいくらいだ。しかし、それは人々が浄土そのものの空想にまずしかったということではなく、生活実感にひびく八大地獄を底辺にかかえてはじめて成り立つ浄土のイメージは、平穏安息の一点に収斂されるもの以外になかったというべきかもしれない。しかし、仏教が民衆に与えた多彩にして強烈な地獄のイメージは、結果的にはたとえそれが、いわゆる権力体制を強め、現世の秩序の中に、いよいよ民衆を束縛固定することになったとしても、また、そのためには、異形・奇形と思われるまでの懲罰の猛火をいやが上にも炎え上がらせざるを得なかったとしても、この架空なものがもたらす空想は、同時になお隠微に、仏の守護する権力体制そのものをも挑発しつづけたといえるだろう。奇妙なことに、地獄においては〈死〉というものがない。それは、死以上の苛酷な残虐のみが支配する世界であって、〈生〉そのものが〈死〉をこえる苦痛な懲罰であるからだが、そうとしても、気が遠くなるほどの責め苦の時間の果てに、それはまさしく徐々に〈生〉に向って動いている世界なのである。ゆえにそれは、再生されることなく、永遠に寂寥たる荘厳（しょうごん）の中に閉ざされた仏の浄土とはまったく対照的である。地獄を逃げまどう、かぼそく白い人間の肉体とともに、そこにある内的な〈生〉の感覚はいよいよ奇形を深め、深めつつ何度でも地獄の中で再生される。それは不死身で、しぶとい。そして醜く卑しいながら、ふしぎに確実な、手ごたえのある生命感をどろどろと底流させている。

私が信心深い祖母からきかされた地獄の中で、その後さまざまの仏教説話をあさっても中々めぐり会えない話が一つある。それは、とり屋が夜毎に堕ちるとりの地獄の話である。深夜になるとほとほとととり屋の戸を叩く者があって、誰だろうと息をひそめていると、外の物音はしだいに低くざわつき、ついに一枚の板戸が風に倒れるように内がわに倒され、羽をむしられたさまざまなとりが、ぷっぷっと血を吹くとり肌をして何十羽となく乱入してくる。それから庭に大きな釜が用意され、湯がふつふつと煮え立ってくると、羽のない裸のとりがよってたかってとり屋の主人の毛をむしるというもので、煮えたぎる釜の中にほうり込まれるとみるや夜が明け、一瞬のうちになま白く羽をむしられたとりは消えてしまうのだ。私は羽をむしられたとりの姿がきらいであったが、この話をきいてからは、その皮をどうしても食べることができなくなった。祖母に煽られた幻影の中で、私はとり屋の店先に立ってはじっと主人の顔をみつめたりした。けれど、ではいったい、とり屋は何を売ったらいいのだろう。子供の私に結論はなく、祖母の商う筆の毛に、たぬきとか、しかと書かれているのを不安げにながめるだけだった。それらの地獄がもちろん作り話であることは子供心にも理解されていたが、なぜか話は嘘でありながら嘘でない迫真力をもっており、地獄への幻想を夜毎に育て、その夜の幻想ゆえに、私には夜そのものが地獄と思われたのであった。

後冷泉天皇永承六年（一〇五一）は末法元年に当る。関白左大臣頼通は、翌年宇治に平等院を建て、弥陀の浄土への引摂を祈った。しかしまた、末法元年は説話のあけぼのであったともいえよう。きわめて感覚的な把握ではあるが、末法の世にふさわしい地下人の勢力や地方武士

の台頭、活動が活発になり、その実力がみとめられてゆく中に、説話もまた庶民的な力と感覚を身につけ成長していったと思われるからである。深く埋れ、隠れていたものの力が陽の目を見、評価されようという時代の活力と怖れが説話時代のエネルギーであったとすれば、『往生要集』は深く静かにその鎮魂に作用しはじめていたといえよう。「或ハ相好ヲ観ジ、或ハ名号ヲ念ジ、偏ニ穢土ヲ厭ヒ、専ラ浄土ヲ求ム」というのが、その中心とされた思想であり、念仏によって一切が救済されることを示したものである。もちろん念仏を唱えるということは方便であって、そうした行為の中に雑念を消散させ、主体性を取りもどし、もろもろの実相の見えくることを念じたものである。

目まぐるしく移り動く世間的事象や、小手先の権謀術数や政治から離れた形で生きたいと念じ、あるいはまた反対に、それらに対して埒外の立場にしかあり得ぬ悔しさなどを内攻させるものにとって、可能なただ一つの武器が、あるいは矜侍(きょうじ)が、「出家遁世」であり、浄土往生を具体化することであったということは、何とも苦渋にみちた息苦しさを感じさせる。そのゆえか、望みを遂げるために自らえらんだ道とはいえ、出家が、よろこばしいことであったという記述はどこにもない。たしかに、それは仏のよろこび給うことであるとされ、それゆえによろこばしいことであるはずなのだが、一般の情としては、やはり特殊なことであったのだ。「思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。ただ木の端などのやうに思ひたるこそいとほしけれ」と清少納言は言い、事実、出家をする場面には、つねに涙がつきものであった。つまり、法師とは、世間なみの生活者とは、いささかちがうかたちで認識されていたのである。「経た

ふとくよみ、みめ清げなるにつけても、女房にあなづられ」と清少納言が観察する官僧の世界は、ことに、発心という内実にしたがったものではなく、官僧としての階級と秩序に縛られつつ、王朝の威儀を盛んにすることに奉仕する役割を多分に負わされたものであった。

剃髪という儀式と墨染の法衣の風俗は、僧侶を象徴するものではあるが、それは同時にみめの清さと、読経の声の美しさが賞翫される風俗の中で、「女房にあなづられ」る要因を秘め、そのゆえにまた、僧はいっそう女房をあなどったのかもしれない。僧が女房にさえあなどられたという、その存在力の軽さは、官界・政界という男社会の実力抗争の世界から切りはなされた〈場〉に反現世的権威を主張したこととかかわっている。男に従ってはじめて社会的地位を存立させることのできた女の場から評価すれば、僧とは全く現世の役には立たぬ存在であったわけだ。

出家の場に涙がつきものであるのも、当然このことに原因がある。死後を極楽に救済されるという魅力もさることながら、現世の繁栄を願わぬ者はいないとすれば、やはりなお、出家はイコール現世的絶望の象徴でしかなかったのだ。だから、法師にされて、人々から「木の端きれ」ほどにしか思われなくなってゆく男の運命に対して、可哀そうだと素直な感想を述べた『枕草子』の著者は、王権と貴族の繁栄のかたわらに寄りそって成立させられている僧侶の世界の、荘厳（飾り）としての役割をみごとにみぬいていたといえる。

しかしまた、それとは別に、人々から「木の端」のように思われるというあなどりの原因の一つは、その頭に毛髪の存在を許さないという、考えてみれば一種異様な風俗にもあっただろ

う。発心という世捨ての内面は、毛髪を落すこととどのようにかかわっているのであろう。しかし、毛髪が伸びることを許さないその風俗は、伸びた髪を結ぶために生まれたどのような奇妙な髪型よりも自然でないことだけはたしかである。

深作光貞氏の調査によれば、東南アジアの某地方では、魔ものはすべて毛髪を通じて体内に入りこむと信じられているという。逆にいえば、邪悪な女の髪が、一本一本蛇に変ったというような、〈邪〉から〈蛇〉への連想も、仏教的な悪業の比喩としてだけでなく、ギリシャ神話がメドウサを創案したように、比較的自然な古代的連想としてあったものだろう。

もし、発心にともなう剃髪が、魔縁を体内に引きこむことを怖れるゆえに生まれた風習を伝えるものであるならば、剃り落されて出口を失った内なる魔縁は、どれほど苦しく犇き合わねばならなかったであろう。あるいは〈地獄〉という加虐の思想と被虐の思想は、剃髪によって内なる魔縁といっそう激しく葛藤しなければならなくなった人々によって、はじめて発想されたものかもしれないとも思う。それははじめから、二重三重の穢辱にまみれた異形の思想であったのであり、穢土の汚穢なるかがやきにびっしりと裏打ちされたものであったといえるだろう。

だからそれは、末法の世という、稀薄な〈生〉の薄明の時代において、いっそうぎらぎらと脂ぎり、現世への憎しみのため、火車の迎えをいそいそとして人の臨終に送りこむのである。しかし、自らの内なる幻影としての地獄の前に、真摯な怖れと信仰があらわれたとき、僧は、またいっそう苦しみ、二重にも三重にも屈折したその異形の思想を地獄と極楽の中に体系づけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook